

近世の東大寺大仏千僧会等に於ける真宗と時宗・融通念仏宗の対比

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2018-07-04 キーワード (Ja): キーワード (En): Todaiji-temple Daibutsu Senzou-e, Shin-shu(sect), Ji-shu(sect), Yuzu Nembutu-shu(sect) 作成者: 古賀, 克彦 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/865

Comparison of Shin-shu (sect), Ji-shu (sect) and Yuzu Nembutu-shu (sect) on “The Todaiji-temple Daibutsu Senzou-e” during Early Modern Period

KOGA Katsuhiko

Key words

Todaiji-temple Daibutsu Senzou-e / Shin-shu (sect) / Ji-shu (sect) /
Yuzu Nembutu-shu (sect)

Summary

In recent years we have witnessed some advances in the study of “The Great Buddha statue and thousand monk society of Higashiyama, Kyoto” 《京都東山大仏千僧会》 by Hideyoshi Toyotomi 《豊臣秀吉》. On the other hand, the study that took up the revival by Kokei 《公慶》 constituted the main focus of the early modern studies regarding “The Great Buddha Statue and thousand monk society of the Southern capital Todai-ji Temple” 《南都東大寺大仏千僧会》. With regard to this, some historical materials and treatise manuscripts that could reveal the total picture of this Buddhist memorial service have been announced. However, there have been no examinations from the perspectives of Shin-shu (sect) 《真宗》 (East-West Hongwan-ji Temple 《東西本願寺》) and the Ji-shu (sect) 《時宗》. Therefore, I have carried out an examination based on the historical materials belonging to the two sects along with those of the Dainembutu-shu (sect) 《大念佛宗》 (Yuzu Nembutu-shu (sect) 《融通念佛宗》). What I have taken up in this essay are the records of the first seven days from April 2 to 8, 1688 of the three memorial services for the great Buddha statues. I compared the varying records of the same event 《同時異筆》. What became clear from my examination is that the records were prepared on the sixth day for the East-West Hongwan-ji Temple 《東西本願寺》, Jodo-shu (sect) of Chinzei group 《浄土宗鎮西派》, Dainembutu-shu

(sect) 《大念佛宗》, and Ji-shu (sect) of Ryouzen group 《時宗靈山派》. But the Jodo-shu (sect) of Seizan group 《浄土宗西山派》 began to record the service on the day before, which differs from that of the Chinzei group 《鎮西派》. As for the Hongwan-ji Temple 《本願寺》 sect, what stands out is that it is not the main Kyoto temples but the temples from the outlying Yamatokoriyama 《大和郡山》 area that participated in the services. As for the Ji-shu (sect) 《時宗》, only its Ryouzen branch 《靈山派》 participated. It is thought that there was opposition from the other groups. As for the Yuzu Nembutu-shu (sect) 《融通念佛宗》, its name is transcribed as Dainembutu-shu (sect) 《大念佛宗》. Many monks from this sect participated, revealing that the Nara area (where the memorial service took place) constituted “an impregnable castle and moat” for this sect with its show of enthusiasm as the new group to participate in the services.

近世の東大寺大仏千僧会等における真宗と時宗・融通念佛宗の対比

古賀克彦

近世の東大寺大仏千僧会等に於ける

真宗と時宗・融通念仏宗の対比

古賀克彦

〈キーワード〉 東大寺大仏千僧会／真宗／時宗／融通念仏宗

序 はじめに

京都東山大仏千僧会については、一連の河内将芳論考や安藤弥論文等が出されたことについては先述した（本誌三十二号掲載の拙稿「京都東山大仏千僧会に於ける「遊行」と本願寺の対比」。以下、前稿と記す）。

さて、大仏千僧会といえは、本来は南都東大寺のものを指すであろう。だが、近世に於けるそれは、公慶による復興を取り上げた研究が中心であった。その中で、基本資料となったのが佛書刊行會「編纂」『大日本佛教全書』一二二卷「東大寺叢書」二（大日本佛教全書刊行會、一九三二年八月。復刻一九七八年四月、第一書房）である。ところが近年、その法要の全貌を伺う事ができる史料および論稿が陸續と発表されたのである。それによって、再び「東大寺叢書」も脚光を浴びるようになったと実感する。

以下、時系列で紹介する。

○小島裕子「東大寺大仏開眼供養復原（一）——済深法親王と江戸期再興に関する勸修寺所蔵の法会記録——」、「東大寺大仏開眼供養復原（二）——勸修寺所蔵の法会記録 翻刻および解題——」、「大仏殿新始・千僧供養・油倉宝物御覽に関する勸修寺所蔵の法会記録——東大寺大仏開眼供養復原（三） 翻刻および解題——」（以上、『勸修寺論輯』創刊・三・四合併・五号、勸修寺聖教文書調査団、二〇〇四年三月・二〇〇七年七月・二〇〇八年七月）

○島津良子・板東俊彦「玉井家蔵「大仏殿再建記」解説および史料翻刻」（南都佛教研究会「編集」『南都佛教』八十六・八十八・八十九・九十二・九十三號、東大寺図書館、二〇〇五・六・七・八・九年各十二月）

○坂東俊彦「東大寺大仏と融通念佛宗——東大寺江戸復興期を中心に——」（開宗九百年記念・大通上人三百回御遠忌奉修局「編」・福原隆善「監修」『開宗九百年・大通上人三百回御遠忌奉修記念論文集 融通念佛宗における信仰と教義の邂逅』法藏館、二〇一五年五月）

これら諸論稿が提示する各史料は、内容の重複する場合もあるが、お互いの欠を補っている部分もある。それを整理する為に、既に翻刻された史料ではあるが纏めて揭示する事で、相違点を明らかにし、夫々の持つ意味を考察したい。それによって、近世の東大寺大仏千（万）僧会に於ける念仏系教団、就中、真宗（東西本願寺）と時宗、併せて大念佛宗（融通念佛宗）教団の様相の一端が垣間見られると考えるからである。よって、これらの僧団・教団を中心に、対比しながら見て行こうと思う。

なお、本稿では近世教団であることに鑑み、「時衆」ではなく「時宗」の語を用いる。

一 近世記録としての東大寺再建記

前掲した佛書刊行會「編纂」『大日本佛教全書』一二三卷「東大寺叢書」二および鈴木學術財團「編」『大日本仏教全書』四十九卷 威儀部一（鈴木學術財團発行・講談社発売、一九七一年）の目次から、「大仏」「供養」をキーワードに抽出すると、次の項目等が出てくる。

大仏殿千僧供養事 一卷／東大寺大仏開眼供養 一卷／東大寺大仏開眼式 一卷／
東大寺供養日時僧名行事官等之事 一卷／東大寺供養式 一卷／大仏殿千僧供養事 一卷（宝治元年）／
戒壇院本尊供養事 一卷／東大寺造立供養記 一卷／南都大仏供養物語 一卷（慶宣阿闍梨筆）／
大仏殿新始千僧供養私記 一卷（英秀）／大仏開眼供養記 一卷（庸性）／
東大寺大仏開眼供養記 一卷（庸性・浄性）／大仏開眼供養並万僧供養之記 一卷（英秀）／
大仏殿堂供養記 一卷（祐想記）／大仏供養御拵之帳 一卷（伊豆）／
大仏供養請僧天台宗五百口物名帳 一卷／大仏供養法具方帳 一卷（松井伊豆）／大仏供養記 一卷
これらの内、近世のものを抽出すると、次の三時代・四点に絞られる。

大佛殿ちようなほはじめ新始千僧供養私記（貞享五年）

大佛開眼供養記（元祿五年）・大佛開眼供養竝萬僧供養之記（元祿五年）

大佛殿堂供養記（寶永六年）

要は、江戸期における東大寺大仏殿の再建、及び大仏の修造開始（新始）の法要（貞享五年Ⅱ一六八八）、

そして大仏の完成による開眼供養（元祿五年Ⅱ一六九二）、最後に大仏殿の完成（寶永六年Ⅱ一七〇九）という、一連の流れの法要記録群である。

では順に見て行くと、まず「大佛殿新始千僧供養私記」である（『東大寺叢書』第二、五三～八二頁）。ちょうど二〇一五年六月三十日（火）～八月十日（月）、東大寺総合文化センターに於ける特集展示「公慶上人による江戸復興」に、『大仏殿新始千僧供養私記』は出陳されており、その解説に、「大仏殿新始千僧供養私記 江戸時代・貞享五年 一冊 紙本墨書 大仏殿を造りはじめる初日の儀式（新始め）の記録。七日間続いた儀式でお齋を受けた（食事をした）人は約六万人と記録され、奈良が大いに賑わっていた様子もうかがえる。」とある。

この「大佛殿新始千僧供養私記」は貞享五年（一六八八）九月晦日に元祿と改元（四月二日から八日までの大仏殿の新始を記した文書で、各地から三千五百人の大工と千人の僧、参詣人は六万、奉加錢千両が集まった）が見える。

次に、「（東大寺）大佛開眼供養記・大佛開眼供養竝萬僧供養之記」は元祿五年（一六九二）三月八日から四月八日まで一ヶ月間の開眼供養の様子を記すが、ここに山田道安が作った銅板の仮の頭部の面容を模したこと等が出ている。

最後の「大佛殿堂供養記」は寶永六年（一七〇九）三月二十一日開闢、四月八日結願の法要を前後も含めて記録している。

これらの法要は古代・中世の東大寺大仏開眼法要のような公武国家権力主催のものではないものの、南都のみならず近隣諸宗が参集・出座した一大盛儀であった。にも拘わらず、南都以外の現代諸宗にとっては、それほど重きを置かれてはいないようである。まさに等閑視されてきたのである。

例えば、所謂「鎌倉仏教」乃至「戦国仏教」と呼称される教団史の中での位置づけはどうか（以下、数字等は出典を一部改めた）。

大谷派の大谷大学「編」『真宗年表』（法藏館、一九七三年十一月）には、一六八八（元禄元）「一般事項」の四月項に「公慶に勅し東大寺大仏殿を再興させる。」、一六九二（元禄五）「一般事項」の三月項に「東大寺大仏殿再建開眼供養。」、一七〇九（宝永六年）「一般事項」の三月項に「東大寺大仏殿再建供養。」とはあるものの、「主要事項」に全て関連記事は無い。

本願寺派の本願寺史料研究所「編纂」『本願寺年表』（浄土真宗本願寺派、一九八一年十一月）には、元禄元（一六八八）「一般事項」の四月項に「公慶、東大寺大仏殿再興を開始。」、元禄五（一六九二）「一般事項」の三月項に「東大寺大仏殿落成。」とはあるものの、「主要事項」に全て関連記事は無い。こちらには、宝永六（一七〇九）の「一般事項」にすら何の記事も無い。

望月華山「編」『時宗年表』（角川書店、一九七〇年一月）には、何の記事も無い。

ところが、融通念佛宗教学研究所「編纂」『融通念佛宗年表』（融通念佛宗総本山 大念仏寺、一九八二年三月）には、元禄元年（一六八八）にこそ記事は無いものの、元禄五年（一六九二）「本山関係事項」に漸く「山主大通」「南都東大寺大仏開眼供養（3・8〜4・8日）3・28に参列」とあり、「一般宗教史」の三月項にも「東大寺大仏殿再建開眼供養」、宝永六（※「年」の字、欠）（一七〇九）「本山関係事項」に「山主大通」「大通南都大仏殿の嘉会に請ぜられ導師となり親修（清）」とあり、「一般宗教史」にも「東大寺大仏殿落慶供養」とある。この「清」については、同書巻末記載の凡例に依れば、清原実明稿「融通年仏宗年表」の略称、との事である。融通念佛宗と東大寺大仏関係法要との関係および意義については、先の坂東俊彦論文に詳しい。実は当方も、公慶の勸進聖としての事績と、南無阿弥陀仏重源に由来する阿弥陀仏号「敬阿弥陀仏」には注

目していたものの、諸宗参集の法要意義については甚だ不勉強であったが、この坂東論文によって蒙を啓かれたのである。また、坂東論文の導きによって先の小島裕子論文も知る事が出来た。記して感謝の言葉としたい。さて、本稿では、上記三法要の内、最初の貞享五年（一六八八）四月二日から八日までの大仏殿の記録を、同時異筆のものによって比較したいと考える。

① 『大佛殿新始千僧供養私記』（大日本佛教全書『東大寺叢書』二）

② 『大仏殿再建記』（島津良子・板東俊彦「玉井家蔵」大仏殿再建記」解説および史料翻刻」第一回）

③ 『南都大佛木作始儀式』・④ 『南都大佛新始諸宗参詣次第』（以上、小島裕子「大仏殿新始・千僧供養・油倉宝物御覧に関する勸修寺所蔵の法会記録―東大寺大仏開眼供養復原（3）翻刻および解題―」）

翻刻本文部分の転記に当たっては、書体は出来る限り正字を用い傍注は括弧を付けて本文に挿入し（括弧内は8ポイント）、小字は本文の9・5ポイントに対し、6ポイントとした。標出の級数も6ポイントとし、一部、レイアウトを変更した箇所もある。また、異体字を用いている漢字や仮名の合字は通用体の正字等（葬・同・ヨリなど）で表記した。改行は「」で表す。

二 史料① 『大佛殿新始千僧供養私記』

以下に、史料①『大佛殿新始千僧供養私記』の主要部分を転記し、重要な箇所は太字にして強調した。

初日

四月二日晴天

一 開關法事。專寺並末寺勤レ之。(中略)

當寺別當勸修寺二品法親王濟深御着座。(中略)

東大寺學侶十三人。(中略) 幼性僧四人(中略)

同法花堂衆六人。中門堂衆一人。(中略) 幼性僧一人(中略)

末寺分 新藥師寺二口。高山寺二口。法樂寺二口。崇敬寺六口。(中略)

南都永福寺。十輪院。其外眞言宗卅六人。無緣僧等。不知數(中略)

一 誓願寺方丈隱居。北洛淨土 聖迎菴曲空夏玄山 伴僧等宜芳 淨意 燒香。

第二日 四月三日晴天

一 招提寺衆僧三十人。從僧廿人。(中略)

第三日 同四日雨天

一 佛國寺高泉和尚。黃檗派禪宗山城 唐僧惠門禪師嗣法 代僧心宗伴僧等四人 燒香。

一 空谷和尚隨僧三人 燒香。

第四日 同五日晴天

一 興福寺一乘院二品法親王眞敬僧正 御燒香。(中略)

一 法隆寺學侶十八人。法事勗レ之。(中略)(※勗レキヨク・コク)

第五日 同六日晴天

一 忍辱山圓成寺衆僧七人燒香。(中略)

一 長谷寺小池坊僧正。衆僧五拾人。(中略)

法事勤レ之。(中略)

一 黄檗派禪宗衆僧六拾人。(中略)

南源拈_レ香而誦_二法語_一。

南源和尚。國壽寺住。唐僧。攝州大阪天德山住。隱元

嗣法。裝束黃衣赤七條。

即空和尚。南都瑞景寺住。裝束同_レ前。木菴嗣法。

梅谷和尚。郡山法光寺住。裝束紫衣赤七條。木菴嗣法

即光和尚。アキママ 願寺住。南源嗣法。裝束同事。

法事勤_レ之。各燒香之後。左右立列誦經。南源曲録座。

一 西大寺衆僧末寺等兼大安寺四拾七人。隨僧廿人。於_二食堂_一如法有_二受齋_一。

法事勉_レ之。(中略)

一 西山派淨土宗長老七人伴僧等誦經燒香勤_レ之。

第六日

同(アキママ)日晴天

一 内山永久寺。上乘院家亮忠。從僧二人學侶五人燒香。

一 安井道恕僧正。(中略)

一 鎮西派淨土宗。法事勗_レ之。

北京惣本寺

知恩院感榮和尚名代勝巖院乘譽還嶺。役者德林院忠譽源歷。(中略)同寺中九人。(中略)同洛中門下長老

四人。同平僧卅一人。(中略)南都長老十一人。平僧一人。郡山長老六人。平僧廿八人。(中略)

一 向宗東本願寺門下五人。從僧九人誦經燒香。

一 同西本願寺門下拾人。從僧廿二人誦經燒香。

一 大念佛宗卅一人。但伴僧共 焼香誦經。

從「中門」行列。先へ龜鐘華器持レ之。花平人之。至「佛前」立列。鐘二三聲打レ之。花ヲ散び一人宛着「本座」。

右之通成レ之訖而誦經退出。郡山鎮西派。

一 西岸寺。北京山城愛宕郡 從僧四人焼香。

一 丸山安養寺時宗七人焼香。

第七日 四月八日晴天

一 藥師寺衆僧拾人。承仕五人 焼香。(中略)

一 漢松院獨吼和尚代僧暉山伴僧等 焼香。

一 大乘院信雅僧正 御焼香。

同門下寺僧。(中略)

一 隱遁長老六人。從僧拾貳人焼香。

結願法事。(中略) 東大寺竝末寺等勤レ之。(中略)

一 安井觀勝寺道恕僧正御着座。(中略)

一 七日之内。僧俗施齋人數。初日五千九百人。／第二日四千七百人餘 第三日三千人餘

第四日八千五百人餘 第五日一萬人餘／第六日九千三百人餘 第七日一萬七千九百人餘

合五萬九千三百人餘。(中略)

諸宗僧名之事(中略)

一 東本願寺派

南都 德願寺專信。同 光瀨寺春徹。同 專念寺祐圓。

同 南蓮寺玄隆。同 教行寺了伯 各從僧有之。

一 西本願寺派

南都 淨教寺行空。弟子行蓮。同末寺 照光寺春海。

同末寺 長泉寺。郡山 光慶寺正意。同末寺 信行寺正玄。

南都 正覺寺了玄。

郡山 正顯寺榮春。同 淨照寺空山。菅原 西蓮寺香雲。各從僧有之 (中略)

一 大念佛宗

鳴川町 德融寺良空。十輪院町 法德寺巖譽。郡山矢田町 圓融寺團譽。

生駒 安養寺信空。龍田 西光寺岷空。齊音寺町 蓮生寺幽音。

下長村 正念寺三譽。稻葉村 成安寺三空。笠符村 成福寺惠忍。

三維村 多聞院行譽。藤木村 極樂寺圓我。同村 彌勒寺壽益。

狹川村 光明寺善益。同所 西念寺達空。二名村 法融寺良圓。

田中村 地藏寺感空。櫻木村 大興寺圓察。林村 金福寺覺譽。

河州水越村 蘭光寺傲禪。合拾九ヶ寺侍者十四人。(中略)

一 山城國愛宕郡丸山安養寺。多福庵 眼阿彌慈觀。

勝興庵 漢阿彌一聲。同 聲阿彌其諺。

花樂庵 梵阿彌歸三。同 重阿彌湖仙。

長壽庵 量阿彌賢保。延壽庵 連阿彌清養。

多藏庵 底阿彌湖雲。

圓山安報寺三代宣阿弥陀佛
 以置字之旨令免許處也自今
 以後門下之為知識間護念
 宗門之法意而六時勤行無
 懈怠可被稱号者也仍補
 任之狀如件
 南無阿弥陀佛
 靈山
 享保十九甲寅年五月十八日 正法寺

免狀
 一本尊名號之事
 一導師知識之事
 一白衆沙衆之事
 右令免許乎自今以後
 不替本寺之余可被遂
 歸命者也
 南無阿弥陀佛 靈山
 享保十九甲寅年五月十八日 正法寺
 圓山安報寺三代宣阿弥陀佛

※其諺は『緑紅叢書』所載の俳諧名主。号、四時堂。のち七代勝興庵正阿彌主。更に丸山安養寺三十代宣阿弥陀仏。享保十九年
 (一七三四)五月十八日、靈山正法寺より補任免状(安養寺に現存。写真参照)。過去帳では元文元年(一七三六)八月二十
 三日寂、七十一歳。

三 史料② 『大仏殿再建記』

以下に、史料②『大仏殿再建記』の主要部分を転記し、重要な箇所は太字にして強調した。

② 『大仏殿再建記』

(表紙1)「四三／大仏殿再建記」(表紙2)「和州志」大仏殿新始天(中略)

次第目録

貞享第五^{戊辰}年四月二日より同八日まで一七箇日の間、東大寺／大仏殿の木作始の規式あり、人皆新初と云 千人の僧侶、五／百人の工匠出仕す 龍松院公慶日比千人の釈氏を招請し／五百人の工匠を催さはやとの思慮は、本願／聖武皇帝の御規範を慕臨し奉るいハれとも云へしや

第一日 四月二日 今日ハ 聖武天皇 御忌日也

東大寺寺務勸修寺御門跡 御出座

今上皇帝御兄 二品済深法親王^{サシシ} 今年十八歳

今年二月二日東大寺寺務 勅許(中略)

同学侶二十三人 同堂方八人 同末寺方^{新薬師寺二人}／^{崇敬寺六人}高山寺^{二人}／^{法楽寺二人}

右衆僧唄、散花、講読作法勤之

永福寺 十輪院 其外真言宗三十六人釈迦念仏昼夜勤之(中略)

第二日

四月三日

招提寺僧衆三十人 伴僧二十人 各法味勤之(中略)

第三日 四月四日

黄檗派仏国寺高泉和尚使僧心宗、伴僧五人 右焼香勤之(中略)

第四日 四月五日 中日 重源上人命日也

法隆寺学侶十八人 伴僧四人 法味勤之

興福寺一乘院御門跡 御焼香 衆僧四十九人(中略)

第五日 四月六日

忍辱山衆僧七人 焼香勤之

南都西山派浄土 長老七人 伴僧七人 焼香

西大寺衆僧四十七人 徒僧十四人 各法味勤之

長谷寺小池僧正、学侶五十人 法味勤之

黄檗山派南源和尚 即空和尚 梅谷和尚 印光和尚 衆僧六十人 各法味勤之(中略)

一已之尅三長谷寺小池坊、其次に六坊、其次諸化僧マヤ 参詣

一已之下尅三唐僧 国寿寺僧也 南源 寺ハ大坂近辺難波ニ在 経堂東西ノの間にて唐国流の法事あり

一午之下尅に西大寺僧出仕 音楽あり(中略)

第六日 四月七日

京智恩院名代勝嚴院 同役者徳林院 同寺中平僧四十五人 京同門中ノ長老四人

南都長老 同平僧

郡山長老 同平僧 都合八十一人

内山永久寺 上乘院家 学侶五人 各焼香

郡山 西岸寺 随僧四人 焼香勤之

京 靈山時宗七人 焼香勤之

南都 東本願寺門下七人 法味勤之

西本願寺門下十九人 法味勤之 (中略)

第七日 四月八日

薬師寺衆僧十人 焼香勤之

興福寺大乘院御門跡 御焼香

安井御門跡 御出座

御実名道恕 御年二十一歳 久我殿ノ御子 鷹司殿養テ為レ子安井ノの御寺へ据らせらる 安井の御

寺ハ西園寺殿の御持のよし (中略)

御門跡ハ二月堂别当御兼帯たるにより御供ノ人数も多シ (中略)

東大寺衆僧、末寺等如初日出仕 法事 同断 (中略)

一次に東大寺学侶、堂方并末寺の諸出家如第一日東西の廻廊より出仕、於経堂楽人音楽あり

一次に安井御門跡西の廻廊より御出仕、中門にて輿より御出被成、式ノ法の行列にて仏前へ御向ハせ給へ

は、音楽於経堂あり 東大寺学侶、堂方并末寺等の諸出家半途まで御迎に出、今日ハ仏生日にて諸出

家、盤中木影の釈尊に向ひて湯をかけたてまつる御門跡もおなしく湯をかけさせ給ふ 各御供にて仏前

に詣給候御法事あり (以下略)

四 史料③ 『南都大佛木作始儀式』

以下に、史料③『南都大佛木作始儀式』の主要部分を転記し、重要な箇所は太字にして強調した。

③ 『南都大佛木作始儀式』

四月二日開闢

一、不動愛染秘法、戒壇院・新禪院・末寺・律院／之衆僧等修之。

一、於経堂晝夜釋迦念佛、南都永福寺・／十輪院衆僧卅六人无縁僧等唱之。

末寺 新薬師寺（中略）法樂寺（中略）高山寺（中略）崇敬寺（中略）

第二日

招提寺衆僧卅人。伴僧廿人。法事勤之。

京 誓願寺伴僧二人。佛國寺 高泉和尚代僧伴僧五人心宗

各焼香。无縁僧等百三十八人。

第三日

高取 空谷和尚。京 百萬遍僧三人。大坂 西光寺僧三人。

各焼香。无縁僧等七拾貳人。

第四日

法隆寺學侶十八人伴僧四人。法事勤之。

一乘院二品真敬親王。同寺僧四十九人衆徒等。

黄檗山僧七人。京 泉涌寺僧二人。

各焼香。无縁僧等二百十八人。

第五日

西大寺衆僧四十七人伴僧十四人。

長谷寺小池坊僧正卓玄。同寺衆僧五十三人。

黄檗派

摂州国壽寺 南源和尚。南都瑞景寺 即空和尚。郡山法光寺 梅谷和尚。

摂州大願寺 印光和尙。同衆僧六十人。

西山派浄土宗七人伴僧七人。

右各法事勤之。

忍辱山円成寺衆僧七人。摂州 法雲寺僧二人。

右各焼香。 第六日（※この行のレイアウト、出典ママ）

北京 智恩院名代勝嚴院。同門下長老四人。

平僧四拾六人。伴僧十四人。南都郡山門下

長老。平僧八十一人。

南都 東本願寺門下衆僧五人伴僧八人。

同 西本願寺門下衆僧七人伴僧廿二人。

大念佛宗衆僧卅一人。

右各法事勤之

内山 永久寺上乘院家伴僧五人 同寺僧五人。

浄土宗 郡山西岸寺長老伴僧四人 播州 雲松寺僧二人。

北京靈山 安養寺僧七人。右各焼香。

无缘之僧等百八十三人。

第七日

大乘院信雅僧正門下寺僧御供。

葉師寺衆僧九人伴僧五人。

隱遁派長老四人伴僧十八人。

漢松院獨吼和尚代僧暉山 伴僧伴僧二人。

右各焼香。无缘僧三百五人。

結願法事

花巖長吏尊勝院兼安井道恕僧正御出座。(以下略)

五 史料④ 『南都大佛新始諸宗参詣次第』

以下に、史料④『南都大佛新始諸宗参詣次第』の主要部分を転記し、重要な箇所は太字にして強調した。

④「南都大佛新始諸宗參詣次第」

初日 四月二日

東大寺々務勤修寺御門跡、御出座。

同學侶十三人、堂衆七人、末寺新葉師寺二口、末寺高山寺二人、

末寺法樂寺二口、崇敬寺六人、

右唄・散花・講讀作法有之音樂奏之。

末寺永福寺・十輪院衆僧卅六人、其外真言宗非緣僧／等、七日之内晝夜釋迦念佛勤之。

第二日 同三日

招提寺衆僧卅人、從僧廿人、各誦經・稱名勤之。

佛國寺高泉和尚代僧心宗、伴僧五人、燒香勤之。

第三日 同四日

佛國寺僧六人燒香、百萬遍僧三人、燒香。

和州高取空谷和尚、隨僧三人、燒香

第四日 同五日

法隆寺學侶十八人、伴僧四人、各誦經・稱名勤之。

興福寺一乘院御門跡、御燒香。

同衆僧四拾九人、參詣耳。

第五日 同六日

忍辱山衆僧七人、焼香。

南都西山派浄土長老七人、伴僧七人、焼香。

西大寺衆僧四拾七人、同從僧十四人、各誦經・稱名勤之。

長谷寺小池坊僧正、學侶五拾人、誦經等勤之。

南源和尚

黄檗派即空和尚、伴僧六十人、各誦經・稱名_丁。

梅谷和尚

印光和尚

第六日 同七日

智恩院_{名代勝嚴院、役者徳林院}、同寺中并京門下長老四人、／平僧四拾五人、南都郡山長老、平僧八十一人。

各誦經・稱名_丁寧也、

安井御門跡、受齋之後、御參詣、焼香。

内山 永久寺上乘院家學侶五人、伴僧三人、各焼香。

南都并近郷 東本願寺門下五人、伴僧八人、誦經等勤之。

同 西本願寺門下七人、伴僧廿二人、右同断。

同 大念佛宗卅一人、誦經・稱名勤之。

郡山 西岸寺從僧四人、焼香。

京靈山時宗七人、同。

第七日 同八日

薬師寺衆僧九人、焼香。

興福寺大乘院御門跡、御焼香。

安井御門跡、御出座。

東大寺本寺分・末寺分、出仕法事等人数、／同前如初日。

漢松院獨吼和尚代僧暉山、伴僧等。

南都 隱遁長老六人、伴僧十二人。

此外七日之内受齋之僧一千三百人餘。其／外非縁之僧等不及員数。(以下略)

跋　まとめにかえて

以上の比較から気付いた事を列挙する。なお、詳しい比較は末尾に付した表を参照頂きたい。

まず、史料①②と③④では、二日目と三日目の記述に異同が見られる(特に、仏国寺の箇所)。

次に宗派系統別に見て行こう。顕密各宗では、南都諸宗の出仕が目立つのは当然としても、奈良ということもあってか、新義真言は、豊山はあれど智山なし、という状況である。

古義真言は勸修寺門跡が東大寺寺務兼任の為に出席している。但し、後代の法要には高野山も出仕してくる。天台は主だった所は安井門跡のみである。何にせよ、京都における大仏供養への積極的な出仕態度ではない。では京阪奈を中心とした浄土系はどうだろうか。

六日目に東西本願寺・浄土宗鎮西派・大念仏宗・時宗靈山派が揃っている。但し、浄土宗西山派は前日等に

出仕し、鎮西派とは同日になっていない。おそらく意図的なものであろう。

本願寺は京都ではなく、近隣の郡山の出仕が目立つ。これについては後考を俟ちたい。

時宗は何故か靈山派のみが参加している。派祖の国阿に奈良との由縁があったとは思えないが、他派に対する対抗の要素があったのか。但し、後代の法要には「遊行派」「遊行上人代僧」「藤沢派」「藤沢上人代僧」、空也僧も参列している。

融通念仏宗は大念仏宗と表記される。先の坂東論文の註に「大通上人が四六世の大念佛寺の住持となった元禄初年、大念佛宗の末寺の状況は他宗派の僧侶が乱居していたとされ、書き上げられた僧侶の名も他宗派を窺わせるようなものもある。」（掲載書四六七頁）とある如く、鎮西・西山両派に特有の豊亨・空亨が見られる。後代の法要になると、参加僧侶も増加する。奈良は同宗にとつて金城湯池でもあり、新規参入組としての意気込みが感じられる。

それと並んで、新参の黄檗宗の出仕は積極的であり、かつ和尚の記述が詳細である。他の禅宗は宗名も記されていない。これは記録する側の関心度の高さをも物語っていると考える。

それに比して、法華寺院は、やはりと言うべきか不出仕である。受・不受の義というより、公儀主催でもなく、場所も含めて消極的なのであろう。但し、後代の法要には一箇寺ほど記載がある。

以上の分析から、この盛儀出仕を宗勢拡大や知名度上昇の機会と捉えている教団の存在が判明した、と言えるだろう。

さて、この法要の四年後、千僧ではなく万僧による開眼供養が東大寺にて行われるのだが、それについては稿を改めて論じたい。

<p>四 四月五日 重源命日</p>	<p>興福寺一乘院二品法親王眞敬僧 正御焼香 法隆寺學侶一八 法事</p>	<p>興福寺一乘院御門跡 御焼香 衆僧四九 法隆寺學侶一八 伴僧四</p>	<p>一乘院二品眞敬親王 同寺僧 四九衆徒等 法隆寺學侶一八 伴僧四 法事 之 黄檗山僧七</p>	<p>興福寺一乘院御門跡 御焼香 同衆僧四九 參詣耳 法隆寺學侶一八 伴僧四 各誦 經・稱名勤之</p>
<p>五 四月六日</p>	<p>忍辱山圓成寺衆僧七 焼香 長谷寺小池坊僧正 衆僧五〇 法事</p>	<p>忍辱山衆僧七 焼香勤之 長谷寺小池僧正 學侶五〇</p>	<p>忍辱山円成寺衆僧七 僧等二一八 京 泉涌寺僧二 各焼香 无録 長谷寺小池坊僧正卓玄 同寺衆 僧五三</p>	<p>忍辱山衆僧七 焼香 長谷寺小池坊僧正 學侶五〇 誦經等勤之</p>
<p>六 四月七日</p>	<p>黄檗派禪宗衆僧六〇 南源拈香 而誦法語 南源和尚 國壽寺住 唐僧 攝州大阪天徳山住 隱元 嗣法・即空和尚 南都瑞景寺住 木菴嗣法・梅谷和尚 郡山法光 寺住 木菴嗣法・即光和尚 願寺住 南源嗣法 法事勤之 各焼香之後 左右立列誦經 源曲録座</p>	<p>黄檗山派 南源・即空・梅谷・ 印光和尚 衆僧六〇 法味勤之</p>	<p>黄檗派 摂州国壽寺 南源和尚 ・南都瑞景寺 即空和尚・郡山 法光寺梅谷和尚・摂州大願寺印 光和尚 同衆僧六〇</p>	<p>黄檗派 南源和尚・即空和尚・ 梅谷和尚・印光和尚 伴僧六〇 各誦經・稱名丁寧</p>
<p>僧俗施齋人数一〇〇〇余 内山永久寺 上乘院家亮忠 從 僧二 學侶五 焼香 安井道愨僧正</p>	<p>西大寺衆僧 末寺等兼大安寺 四七 隨僧二〇 於食堂如法有 受齋 法事勉之</p>	<p>西大寺衆僧四七 從僧一四 各 法味勤之</p>	<p>西大寺衆僧四七 伴僧一四 西山派淨土宗七 伴僧七 右各 法事勤之</p>	<p>西大寺衆僧四七 同從僧一四 各誦經・稱名勤之</p>
<p>西山派淨土宗長老七 伴僧等 誦經焼香勤之</p>	<p>南都西山派淨土 長老七 伴僧 七 焼香</p>	<p>西山派淨土宗七 伴僧七 右各 法事勤之</p>	<p>西山派淨土宗七 伴僧七 右各 法事勤之</p>	<p>南都西山派淨土長老七 伴僧七 焼香</p>
<p>同寺僧五 内山 永久寺上乘院家 伴僧五 同寺僧五</p>	<p>摂州法雲寺僧二 右各焼香 内山 永久寺上乘院家 伴僧五 伴僧三 各焼香 安井御門跡 受齋之後 御參詣 焼香</p>			

									六 四月七日
									鎮西派淨土宗 法事場之 北京 惣本寺 知恩院感榮和尚名代勝 敎院乘譽還嶺・役者徳林院忠譽 門中長老 四 南都長老 同平僧 老 四 同平僧三 一 南都長老 一 一 平僧一 郡山長老六 平 僧 二 八
									京 智恩院名代勝敎院 同役者 徳林院 同寺中平僧 四 五 京同 門中長老 四 南都長老 同平僧 郡山長老 同平僧 八 一
									北京 智恩院名代勝敎院 同門 下長老 四 平僧 四 六 伴僧 一 四 南都郡山門下長老 平僧 八 一
									智恩院 名代勝敎院・役者徳林 院 同寺中并京門下長老 四 平 僧 四 五 南都郡山長老 平僧 八 一 各誦經・稱名丁寧也
									南都并近郷 東本願寺門下五 伴僧八 誦經等勤之 同 西本願寺門下七 伴僧二二 右同斷 同 大念佛宗三一 誦經・稱名 勤之 郡山 西岸寺徒僧 四 燒香 京靈山時宗七 同
									無縁之僧等一八三 漢松院獨吼和尚代僧暉山 伴僧 二 右各燒香 無縁僧三〇五 大乘院信雅僧正 門下寺僧御供 隱遣派長老 四 伴僧一八
									藥師寺衆僧九 燒香 漢松院獨吼和尚代僧暉山 伴僧 等
									興福寺大乘院御門跡 御燒香
									安井御門跡 御出座
									東大寺本寺分・末寺分 出仕法 事等人数 同前如初日 伴僧二二 南都 隱遁長老六 伴僧一一 此外七日之内受齋之僧一三〇〇 餘 其外非縁之僧等不及員數
									七 四月八日 灌佛会 結願法事
									藥師寺衆僧一〇 承仕五 燒香 漢松院獨吼和尚代僧暉山 伴僧 等 燒香 大乘院信雅僧正 御燒香 同門 下寺僧 隱遁長老六 從僧一二 燒香 結願法事 東大寺竝末寺等勤之 北京 安井觀勝寺道恕僧正御着 座 僧俗施齋人数一七九〇〇余 僧俗施齋人数 合五九三〇〇余
									藥師寺衆僧一〇 燒香勤之 興福寺大乘院御門跡 御燒香
									安井御門跡 御出座
									安井御門跡 御出座

大念佛法宗

菅原	同	郡山	南都	同末寺	郡山	同末寺
西蓮寺香雲	淨照寺空山	正顯寺榮春	正覺寺了玄	信行寺正玄	光慶寺正意	長泉寺
駒郡伏見村菅原	駒郡郡山町	駒郡郡山町	野郡吉野村飯貝	信行寺 眞本、本二。南	駒郡郡山町今井町	光慶寺 眞本、本一。生
西蓮寺 眞本、餘間。生	浄照寺 眞本、外列。生	浄照寺 眞本、内列。奈良市南城中町	野郡吉野村飯貝	信行寺 眞本、本二。南	光慶寺 大和郡山市今井町三五	光慶寺 大和郡山市今井町三五
	工町七	方町四	正覚寺 奈良市南城北戸北			
	北大工町	浄照寺 (大和郡山市)	正覚寺 (奈良市) 南中町一七 ※4	信行寺 (北葛城郡) 河合村山之坊五五八	光慶寺 (大和郡山市) 今井町二九	光慶寺 (大和郡山市) 今井町 ※3
町四七二	西蓮寺	浄照寺 大和郡山市北	正覚寺 奈良市南中町一七番地	信行寺 奈良県北葛城郡河合町山坊五五八	光慶寺 大和郡山市今井町三五	光慶寺 大和郡山市今井町三五
和名等	寺院・僧名	史料 A	史料 B	史料 C	史料 D	史料 G
鳴川町	徳融寺良空	鳴川町	徳融寺 奈良市鳴川町二五	徳融寺 (奈良市) 鳴川町二五	徳融寺 奈良市鳴川町	和名添上郡南都 徳融寺 和名七ヶ寺ノ内大末寺也住持代々弟子讓当住持良空長老京都東山禪林寺二而修学相勸
十輪院町	法徳寺嚴譽	法徳寺 融、二。奈良市十輪院町	法徳寺 奈良市十輪院町二三	法徳寺 (奈良市) 十輪院町二三		和名添上郡南都十輪院町 法徳寺 住持代々弟子讓但住立の去年丙辰入院 從元大念仏宗剃髮
郡山矢田	圓融寺團譽	圓融寺 融、二。生駒郡	圓融寺 大和郡山市矢田町通一八	圓融寺 (大和郡山市) 矢田町一八	圓融寺 奈良県大和郡山市矢田町通 ※6	和名添下郡郡山 圓融寺 和名七ヶ寺ノ内大末寺也住持代々弟子讓但住持單譽長老七年前辛亥入院 元浄土宗大念仏宗婦依
町						

近世の東大寺大仏千僧会等に於ける真宗と時宗・融通念仏宗の対比

藤木村	三碓村	苜符村	稲葉村	下長村	齊音寺町	龍田	生駒
極樂寺圓我	多聞院行譽	成福寺惠忍	成安寺三空	正念寺三譽	蓮生寺幽音	西光寺岷空	安養寺信空
極樂寺融、六。生駒郡 富雄村藤ノ木	多聞院融、二。生駒郡 富雄村三碓 ※8	誠福寺融、七。山邊郡 二階堂村荒蒔	成安寺融、九。山邊郡 二階堂村稲葉	正念寺融、六。磯城郡 川西村下永		西光寺融、二。生駒郡 龍田町龍田	安養寺融、四。生駒郡 北倭村上
	多聞院 奈良市三碓一 七―二	誠福寺 天理市荒蒔町二 五二	成安寺 天理市稲葉町一 六四			安養寺 生駒市上町四六 一九	安養寺 生駒市山崎町三 ―六
	多聞院（奈良市）三碓 一―九五 ※9 「寺院名鑑に記載あり」	誠福寺（天理市）大字 荒蒔二五二	成安寺（天理市）大字 稲葉一六四	正念寺（磯城郡）川西 村下永三八四		西光寺（生駒郡）斑鳩 町竜田三一六一 ※7 「寺院名鑑に記載あり」	安養寺（生駒郡）生駒 町山崎六三二
	多聞院 奈良市三碓一丁 ※10						
和苧添下郡藤木村 極 樂寺 代々看坊当看坊 念永四年以前甲寅入院 元浄土宗大念仏宗婦依	和苧添下郡三碓村 多 聞院 代々弟子讓当住 持円説八年以前庚戌入 院従元大念仏宗剃髮	和苧山辺郡荒蒔村 成福 寺 代々看坊当看坊源依 三廿年以前乙未入院従元 大念仏宗婦依剃髮	和苧城下郡下長村 正 念寺 代々看坊当看坊 源導西堂去年丙辰入院 元浄土宗大念仏宗婦依	和苧城下郡下長村 正 念寺 代々看坊当看坊 源導西堂去年丙辰入院 元浄土宗大念仏宗婦依	和州平群郡龍田新町 西 光寺 代々看坊也但當住 岷空長老五年以前癸丑入 院従此代弟子讓相定元浄 土宗大念仏婦依		和州平群郡生馬谷 〔駒ヶ〕山崎村 安養寺 住持代々弟子讓當住持 十二年以前丙午入院幽 音自元大念仏宗剃髮

同村	彌勒寺壽益	彌勒寺融、五。生駒郡 富雄村中	光明寺 奈良市中町四四〇	彌勒寺(奈良市) 中町 四四四〇	和苧添下郡中村 彌勒寺 代々看坊当看坊助 給五年以前癸丑入院元 浄土宗大念仏宗掃依
狭川村	光明寺善益		光明寺 奈良市田中町二 九七	光明寺(奈良市) 狭川 兩町三八八	
同所	西念寺達空		西念寺(生駒郡) 斑鳩 町興留東一〇一三	西念寺(生駒郡) 斑鳩 町興留六五二	和州平群郡興留村 西 念寺 代々看坊当看坊 松音十二年以前丙午入 院元浄土宗大念仏掃依
二名村	法融寺良圓	法融寺融、二。生駒郡 富雄村	法融寺 奈良市二名町二 四二〇	法融寺(奈良市) 二名 町二四二〇 〔寺院名鑑に記載あり (子安地蔵)〕※11	和苧添下郡二名村 法 融寺 代々弟子讓当住 持七年以前辛亥入院從 元大念仏宗剃髮
田中村	地藏寺感空	地藏寺融、五。生駒郡 平群村富貴	地藏寺(生駒郡) 平群 町大字福貴三三七	地藏寺(生駒郡) 生駒 町福貴三三七	和州平群郡福貴村 地 藏寺 代々看坊当時無 住 此寺聖德太子御開 基古跡紛無御座候
樺本村	大興寺圓寮	地藏寺融、六。磯城郡 川西村結崎 地藏寺融、六。宇陀郡 曾爾村伊賀見 地藏寺融、七。添上郡 五ヶ谷村興隆寺	地藏寺(磯城郡) 川西 町大字結崎一六二	地藏寺(磯城郡) 川西 村結崎一六一 地藏寺(宇陀郡) 曾爾 村伊賀見二二三	和苧添上郡興隆寺村 地藏寺 住持弟子讓当 住持春賢六拾年以前戊 午入院大念仏宗剃髮
		大興寺融、三。添上郡 樺本町	大興寺 天理市樺本町七 五六	大興寺(天理市) 大字 樺本七五六	和苧添上郡樺本村 大 興寺 代々看坊当看坊 卯空拾年以前戊申入院 元真言宗大念仏宗掃依

林村	金福寺覺譽	金福寺 融、六。磯城郡	金福寺(磯城郡) 川西	和彛城下郡吐田之内村 金福寺 代々看坊
河州水越	蘭光寺做禪	圓光寺 融、九。南河内郡玉手村 圓明	町大字吐田一〇三二	村 金福寺 代々看坊 当看坊心譽 西堂去年丙辰入院 元浄土宗大念仏宗婦依
村				河劬高安郡水越村 蘭光寺 代々看坊 当看坊平僧 秀道七年以前辛亥入院 元浄土宗大念仏宗婦

史料① (庵名)	寺院・僧名	史料 H	『東山名勝図会』卷二 (数字は掲載順)		
山城國愛宕郡丸山安養寺		山城國愛宕郡丸山安養寺 御朱印高十二石	(四) 多福庵也阿弥		
多福庵	眼阿彌慈觀	(四) 多福庵	(四) 多福庵也阿弥		
勝興庵	漢阿彌一聲	(一) 勝興庵 塔頭六字	(一) 勝興庵正阿弥		
同	聲阿彌其諺				
花樂庵	梵阿彌歸三	(三) 花落菴	(三) 花落庵重阿弥		
同	重阿彌湖仙				
長壽庵	量阿彌賢保	(二) 長壽院	(二) 長壽庵左阿弥		
延壽庵	連阿彌清養	(五) 延壽菴	(五) 延壽庵連阿弥		
多藏庵	底阿彌湖雲	(六) 多藏菴	(六) 多藏庵源阿弥		

【註】(出典史料中の文言を抽出している)

※1 後嵯峨天皇の御代河内国八尾の庄に行延の草創に係る。

※2 江戸時代を通じて西本願寺の役寺とされ、西本願寺から奈良奉行への交渉の窓口となり、興福寺法会の使者や奈良市中の西本願寺末寺への取次などを勤めるなど大和国の触頭機能を担った。

※3 江戸時代を通じて大和における京都西本願寺の役寺という地位にあり、西本願寺と大和郡山藩の取次を行い、毎年年頭には郡山藩に対する西本願寺の使者を務めていた。また郡山藩と領内の西本願寺末寺との窓口的性格もあり、いわゆる触頭の機能を有した。(中略) 明治九年

(一八七六)の興正寺別派独立には従わず西本願寺末にとどまった。

※4 慶長二年播州明石城主左兵衛守の家士姉崎門右衛門の安置仏を六世了宗に寄進したものを本尊とした。なおさきに堂宇は大和郡山市光慶寺二世超賢坊が天正年間に建立、五世了賢坊の時再建したものである。

※5 寛永十年位蔵の創立でもと浄土宗であったがのち本宗に転じ、十代良山一四代観山ともに総本山の学頭職となり宗内十大寺院の一に数えられた。

※6 寺伝によれば、永禄二年(一五六九)郡山の実感が真言宗を修行し初めて当寺を九条村(現大和郡山市)に建て、江戸時代に入り現在地に移され、九世国誓の宝永七年(一七一〇)に融通念仏宗に転じたという。

※7 貞享年間中興真誓覚心が朽廃した堂宇を再建し、念仏弘通の道場として本宗に帰向した。

※8 延寶年中行譽上人、圓説和尚を推して當山再興と爲し檀越大神氏田園を寄せ、且つ寺地を現今の所に移轉す。

※9 行譽が現在地に移した。

※10 もと浄土宗。寛永年間(一六二四〜四四)以後再三火災にかかる。天和二年(一六八二)頃行譽円説が再興。

※11 もと真言宗に所屬していた。創建年代等は不詳。寛文五年現寺号となる。中興開基は学園。融観大通が当地方に念仏勧進以来本宗に改め、今日に至る。

【凡例】

史料① 『大佛殿新始千僧供養私記』「諸宗僧名之事」

史料A 堀由藏(編)『大日本寺院総覧』上巻、明治出版(一九一六年九月。名著刊行会、一九七四年二月復刻)

史料B 寺院大鑑刊行会(編)『寺院大鑑』二卷(近畿・東海・北陸)久遠出版、一九九四年四月

史料C 全国寺院名鑑刊行会(編纂)『全国寺院名鑑』近畿編、史学センター、一九七六年三月改定版

史料D 平凡社地方資料センター(編集)『大和・紀伊寺院神社大事典』平凡社、一九九七年四月

史料E 真宗大谷派宗務所出版部(編集)『真宗大谷派寺院名簿』真宗大谷派宗務所、一九七六年十一月

史料F 寺院名簿編纂委員会(編)『浄土真宗本願寺派寺院住所録』浄土真宗本願寺派、二〇〇九年十二月

史料G 融通念佛宗教学研究(編纂)『融通念佛宗年表』融通念佛宗総本山大念仏寺、一九八二年三月、附録「大念仏寺四十五代記録并末寺帳」

史料H 石塚勝(編)『一時宗本末帳所載寺院総覧』西国編(越中・飛騨・美濃・三河以西)(藤沢市文書館(編集・発行)『藤沢山日鑑』別巻)近

侍者記録(一三、二〇一三年三月、所収)

(影印版)・寺院本末帳研究会(編)『江戸幕府寺院本末帳集成』中(水戸彰考館本)、雄山閣出版、第二版(一九九九年十一月)

付記

前掲の小島裕子「大仏殿新始・千僧供養・油倉宝物御覧に関する勸修寺所蔵の法会記録―東大寺大仏開眼供養復原(3) 翻刻および解題―」の末尾に「付記 木子文庫所蔵 新始関連資料」が付されている。

○木子文庫蔵『貞享五戊辰四月八日大佛殿假屋建新始役人之次第 堀内二郎右衛門』一紙とあり、その掉尾に次の文が掲げられている。

一、同二日ヨリ八日迄七日之内、千人僧供養御座候。但山城國・大和國西國ノ僧衆宗旨ハ八宗・九宗共ニ修之入。但ニ法事御座候事。

ここに見られる如く、「八宗・九宗」という認識であることにも注目したい。秀吉の京都大仏千僧会が新たな「八宗」体制の再編成を意味したように、公慶による江戸期の東大寺大仏千僧供養が、融通念仏宗と黄檗宗という近世教団を含めた(南都における)「八宗・九宗」体制の構築の画期となった、と言えるであろう。

但し、数字に拘るのであれば、天台・真言・浄土(鎮西・西山派)・東西本願寺(真宗)・時(靈山派)・大念仏(融通念仏)・禅(黄檗、他)と南都で八宗と考えるのか(つまり南都是一つ)。南都諸宗を弁別し、禅の中から臨濟・曹洞を掻出し、他地域に於いて隆盛を誇る法華を別立すれば、現在に繋がる十三宗体制となる。つまり、現代仏教の萌芽を、この法要に見出すことが出来るのである。

この中で天台宗に就いて補足すれば、「安井御門跡(中略)御実名道恕 御年二十一歳 久我殿ノ御子 鷹司殿養テ為レ子安井の御寺へ据らせらる 安井の御寺ハ西園寺殿の御持のよし(中略)御門跡ハ二月堂別当御兼帯」(史料②)、「花嚴長吏尊勝院兼安井道恕僧正」(史料③)とあるので、本来は華嚴・真言兼学で公卿・法親王が入寺する門跡寺院の尊勝院を、当時は天台の安井門跡が兼務している事が判明する。何れにせよ、天台・真言共に、東大寺寺務や二月堂別当を兼帯しているが故の出仕であろう。

(国府台女子学院高等部教諭(専門) 近世仏教史)